

学校現場を支える教育センターの役割
～オンラインを活用したコンサルテーション～（1年次）

島根県教育センター浜田教育センター
教育相談スタッフ 共同研究

目 次

【要 旨】	1
1 研究の背景	1
(1) 教育相談をめぐる近年の状況と浜田教育センターの相談の特徴	1
(2) コロナ禍でオンラインの活用が進む学校現場	2
2 研究の目的	3
3 研究の方法	3
4 研究の内容	3
(1) オンラインコンサルテーションについてのニーズや課題等の調査	3
(2) オンラインコンサルテーション実施に向けた環境整備	8
(3) オンラインコンサルテーションの実践	10
(4) 学校現場でも使いやすいコンサルテーション環境についての整理・提案	13
(5) オンラインの先進的な活用に取り組む教育施設からの学び	18
5 まとめ	21
【引用・参考資料】	22

「学校現場を支える教育センターの役割」 ～オンラインを活用したコンサルテーション～（1年次）

島根県教育センター 浜田教育センター 教育相談スタッフ 共同研究

【要旨】

コロナ禍により研修の多くもオンラインで実施されるなど、学校現場の教職員の研修や業務にオンラインが活用される場面は確実に広がってきている。文部科学省も「オンラインを活用した教育相談」についての在り方について具体的に言及するなど、これまでは「対面が基本」とされてきた教育相談活動であっても「オンラインをどう活用するか？」という視点で捉え直すことが問われ始めている。この研究では「学校現場を支える教育センターの役割」という視点から、多忙な学校現場で活用しやすく、導入にメリットがあると考えられる「オンラインを活用したコンサルテーション」についての研究と実践を通し、次年度以降も継続して取り組みを続けていけるオンラインコンサルテーションの在り方について探ることとした。

【キーワード：オンラインコンサルテーション 教育相談 相談活動 教育のDX化】

1 研究の背景

(1) 教育相談をめぐる近年の状況と浜田教育センターの相談の特徴

ここ数年、教育現場のみならず、社会全体の主な話題の一つが「コロナ対応」であったことは否めない事実であろう。この3年ほどを振り返ってみても「学校」も「子どもたち」もこのコロナに大きく振り回され、社会のいろいろな仕組みや在り方がコロナ流行前と以降で大きく変わってしまった。変わってしまったことは大小様々あるが、「教育」に関して言えば、コロナの感染状況に合わせて学校が休校になったり、私たちが携わっている「教育相談」については来所相談を中止せざるを得ない時期を経験したりもした。

また、島根県教育センター浜田教育センター相談室（以降、一般的に教育センターを指す以外は、当センターと省略する）の相談の特徴の一つとして、県西部の広範囲なエリアを相談担当対象としている点が挙げられる。そのため、当センターに来所することが時間的に難しい県西部の7市町を対象に年2回の出張教育相談を実施してきた。コロナ禍にあっても、出張教育相談の件数は令和3年度26件、令和4年度21件と減っておらず出張教育相談に対するニーズも増えてきていることが窺える。

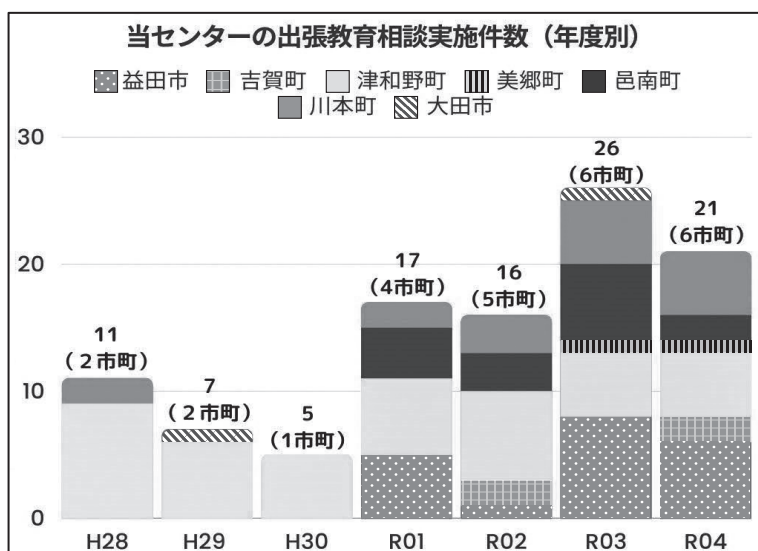


図1 出張教育相談実施件数（年度別）

また同じデータを市町別のグラフ（図2）で見ると、市町ごとの出張教育相談の利用回数も大きく違っていることも分かる。いつもは当センターに来所される相談者が各市町での出張教育相談を利用される場合もあれば、出張教育相談がインテークで来所相談につながるケースもある。これまでの来所だけの相談とは違った出張相談という取り組みにより、県西部の広いエリアを対象とした相談に対応できているという現状がある。

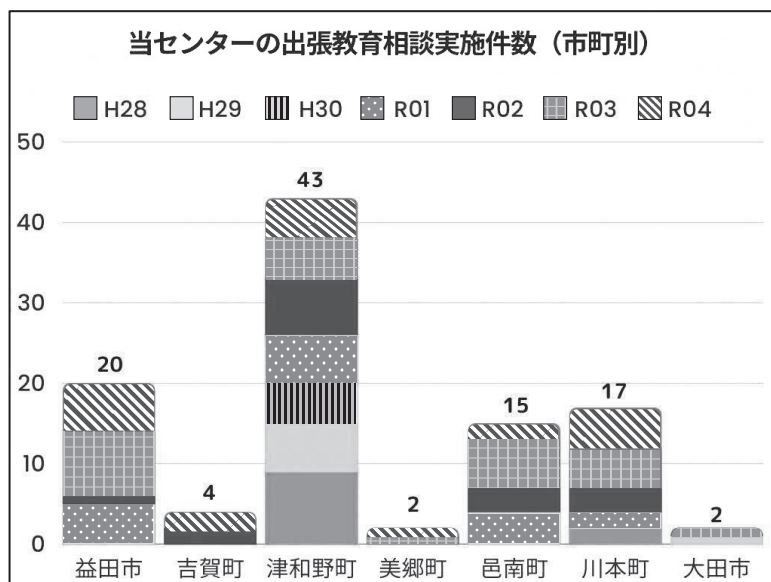


図2 出張教育相談実施件数（市町別）

令和3年度には、コロナの急速な感染拡大によって来所相談の受付を停止せざるを得ない状況になり、来所での教育相談に代る手段として、当センターではオンラインによる教育相談について、ハード面（教育相談用に使えるPCやカメラの整備）、手続き面での仕組み（オンライン教育相談申込書の整備）等を整え、限られた数ケースではあったが、希望者を対象にミーティングサービスを使ったオンライン教育相談も実施することもできた。令和4年度の現在もオンライン教育相談について対応可とはしているものの、コロナ対策が緩和されつつある社会の流れに沿うように、オンライン教育相談の件数は減って令和4年度は実際には0件となっている。

（2）コロナ禍でオンラインの活用が進む学校現場

令和2年下旬から令和4年にかけて島根県教育センター、および島根県教育センター浜田教育センターで実施する教職員対象の研修講座の多くがオンラインでの実施（または中止）を余儀なくされ、教職員がオンラインでの活動に触れる機会が格段に増えたということも、コロナ禍が学校現場にもたらした大きな変化の一つである。

教職員の研修講座については、対面研修とオンライン研修どちらにも一長一短があることが受講者へのアンケートなどから窺えている。特に参加者相互の演習などを含まない講義型の研修である場合、オンライン研修実施時のメリットとして挙げられている一つに「移動時間を考慮しなくてよくなった」「学校（授業）を空けずに受講することができた」「学校にいながら受講できる良さがある」という肯定的な意見が少なからず見受けられた。

このコロナ禍で、教職員の研修講座受講に向けて各学校で通信環境や機材などが整備されつつある今こそ、オンラインを積極的に活用することが、遠隔地が多い当センターの教育相談活動に有益に働くのではないかと考えた。また、オンラインでのコンサルテーションを増やすことで多忙な学校現場の教職員の来所の負担軽減にもつながるのではないかと考え、今年度の研究テーマとして取り上げ、研究と実践をすすめていくこととした。

2 研究の目的

当センターでは、近年「学校現場での活用に資するもの」「学校現場を支える」を一つの目的として研究テーマを選定し、研究と実践に取り組んできている。前述の研究の背景にあるように「オンラインを活用したコンサルテーション」については、当センター相談室が対象としている、広範囲にある県西部の学校や教職員にとって利点が大きいと考え、「オンラインを活用したコンサルテーション」について実際にコンサルテーションをオンラインで実践していくことを考えた。実践を進めていく中での課題や、保護者、相手校などとのやり取りの方法などの手順等を整理し、次年度以降もさらに「学校現場で活用され、メリットと感じてもらえる」オンラインコンサルテーションの方法や在り方について検証し提案する。

3 研究の方法

- (1) 学校現場でオンラインコンサルテーションについてのニーズや課題と考えられている点についてアンケート調査する。
- (2) オンラインコンサルテーションを実施するにあたって整備すべき環境（手続き・先方との調整・ミーティングサービスの準備等）を調査し整える。
- (3) 実際にオンラインを使ってのコンサルテーションを実践する。
- (4) オンラインコンサルテーションを行った学校に対し事後アンケートを行い、さらに現場でも使いやすいコンサルテーションの環境などについて整理、提案する。
- (5) 先進的に「オンラインでの教育相談」に取り組んでいる施設、機関などを訪問し、更に次年度以降「オンラインでの教育相談」に対応していくために当センターで整備すべきこと等について、実践に活かせる取り組みについて調査する。

4 研究の内容

(1) オンラインコンサルテーションについてのニーズや課題等の調査

学校現場で実際にコンサルテーションやケース会議にかかわり、運営する立場にあるのは、主に、管理職、生徒指導主任・主事、教育相談コーディネーター、特別支援教育コーディネーターではないかと考えた。この役職を担っている教職員を対象に現在、各学校で行われているコンサルテーションの課題などについての意識調査をすることにした。

令和4年5月～6月にかけて、島根県教育指導課子ども安全支援室主催の研修に、当センターと島根県教育センターの指導主事が研修講師として呼ばれる機会があり、その研修会時に下記のようなアンケート調査を行った。この研修は、県内の小・中学校全ての生徒指導主任・主事を対象に行われた悉皆研修であり、日頃から生徒指導や教育相談の業務に直接携わっている教職員が集まっていたため、学校現場ではどのようにコンサルテーションが行われ、どのような課題があると考えられているのかを知ると共に、コンサルテーションをオンラインで実施する場合の課題点やメリット等について、このアンケート調査を基に望ましいオンラインコンサルテーションに向けての考察ができると考えた。

【「オンラインを活用したコンサルテーションについて」アンケート調査】

実施時期：令和4年5月19日～6月3日

実施対象：子ども安全支援室企画の「令和4年度生徒指導主任・主事等研修」受講者
(島根県下の全ての小・中学校生徒指導主任および管理職等が対象)

研修内容は「次へのヒントが見つかるケース会議」の運用に向けての講義と演習を含む。

調査方法：QRコード読み取りによる Google フォームへの入力または、質問紙による回答

回答総数：256名：小学校172名(67.2%) 中学校81名(31.6%) 高校3名(1.2%)

①アンケート質問項目 (実際は Google フォームを使った入力により実施)

問1：外部機関を交えてのケース会議やコンサルテーションを実施していますか？

している

していない

その他(自由記述)

問2：オンラインで行う会議や研修機会が増えてきていますが、ケース会議やコンサルテーションなどもオンラインでできるようになると良いと思いますか？

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

とてもそう思わない

とても思う

問3：ご自身の今の学校でオンラインでのケース会議に参加したり主催したりすることを考えた場合、課題となる点はどんなことがありますか？(複数回答可)

機器やハード(パソコンやタブレット)が揃っていない

回線が不安定である

互いの声が聞き取りにくい

互いの表情が見えにくい

ミーティングサービスが相手と同じでない(Zoom、Meet、Webex)など

ミーティングサービス(デバイス)の操作に慣れていない

その他(自由記述)

問4：オンラインでケース会議やコンサルテーションを行う場合のメリットとして考えられることは？(複数回答可)

参加者の時間調整がしやすい

短時間で終わる

話しやすい

会議が深まる

その他(自由記述)

問5：有効、活発にオンラインを活用したケース会議やコンサルテーションができるために必要だと思われること改善したほうが良いと思われること(自由記述)

②アンケートの各質問からの考察

問1：外部機関を交えたケース会議およびコンサルテーションの実施については、6割近くの学校で実施されているという回答であった。半数以上の学校でケース会議やコンサルテーションに外部機関に入ってもらっているというのは、予想された妥当な割合であると思われる。逆に4割の学校では、外部機関を交えての会が実施されていないという実態からは、他機関との連携を今後も広げていくことの必要性が浮かび上がった。

また「実施している」という校種を詳細に見ていくと、小学校が約61%、中学校38%と小学校の方がよりコンサルテーションやケース会議を実施していることが分かった。(図3)中学校の方が、外部機関を交えての会議へのニーズがあるのではと予想していたが、「ニーズはあるものの実施に至っていない」という実態があることが分かり、開催しやすいコンサルテーション会議を提案することで、実施件数を上げ、学校現場を支援することができるのではと考えた。

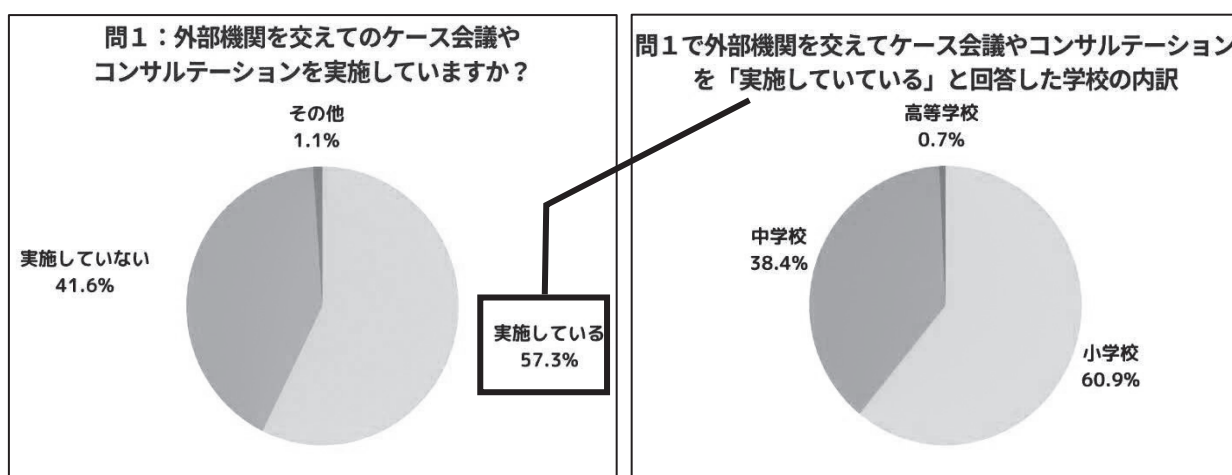


図3 コンサルテーション実施状況と実施している校種

問2では、オンラインでの研修機会などが増えている現在の状況を考え、今後、オンラインでのケース会議やコンサルテーションが増えることへの期待を尋ねてみた。教職員もオンラインでの研修などで機器の取り扱い等に慣れてきていることを考えると、オンラインでのコンサルテーションに期待する回答が多いのではないかと想像したが、結果は、

「そう思わない・とてもそう思わない」との回答が予想以上に多かった。その理由として、学校や教職員が課題と感じている点について、次の設問：問3で具体的にオンラインコンサルテーションを実施する場合の不安要素や課題となると考えられる点を訊いている。

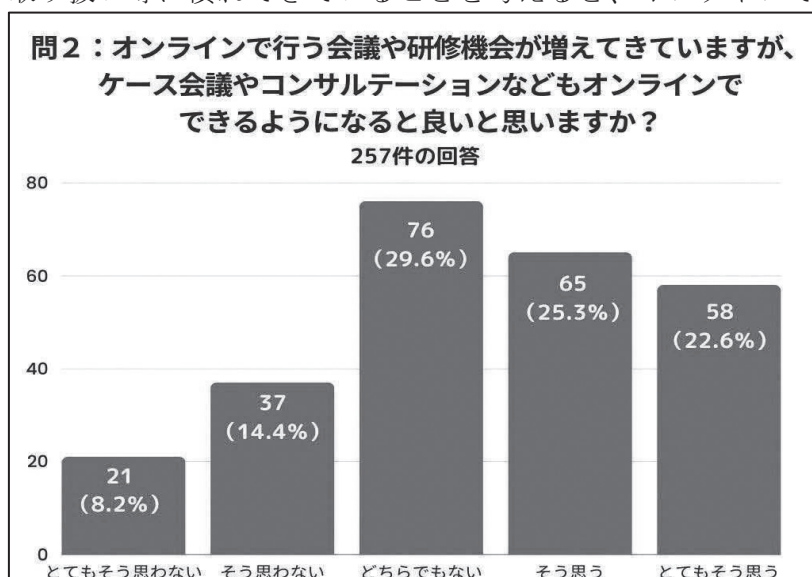


図4 オンラインコンサルテーションへの期待

「課題となる点」として回答した教職員の実に51%が「ミーティングサービス（デバイス）の操作に慣れていない」ということを挙げており、続いて「回線の不安定さ」というハード面に関する点を挙げている。（図5）

オンライン研修に参加する場合と違い、自分で会議の設定やパスワード等をしなければならないということや、ハード（機材）面での不安が多くあることが伺えた。

通信回線の不安定さについては、学校現場だけで解決することが難しい課題であり、ミーティングサービスの操作の習熟や経験回数によって解決できないことも、オンラインでのコンサルテーション実施に消極的になる要因になっていることが分かった。

また、「やりとりをする相手の顔が見えにくい・声が聞き取りにくい」という意見が続いており、一人一台の端末で参加するような環境ではなく、複数の教職員が集合して一つのカメラで定期的に映す会議運営のやり方を経験したことを自由記述に挙げているものもあった。

また、同設問での自由記述に多く挙がっていたのは「適した部屋（環境）がない」という回答でもあり、単に通信環境が整った部屋ということだけでなく、「双方向のやり取りに適した、周囲が静かな環境の部屋」や「個人情報話すのに周囲に気を遣わず話せる部屋」の不足という課題があることも分かった。機材や通信状況だけでなく個人情報の機微に触れる話題が多い「コンサルテーション」ならではの、環境整備の難しさが伝わってきた。「空気感が伝わらない」「対面である方がコンサルテーションには向いている」という意見も数は多くないものの見受けられた。

問4ではオンラインコンサルテーションのメリットについて訊いている。これについては「参加者の時間調整がしやすい」に81.3%の教職員がメリットとして回答していた。また「短時間で終わる」という回答からは、前後の移動時間を含めた拘束時間が少ないこともメリッ

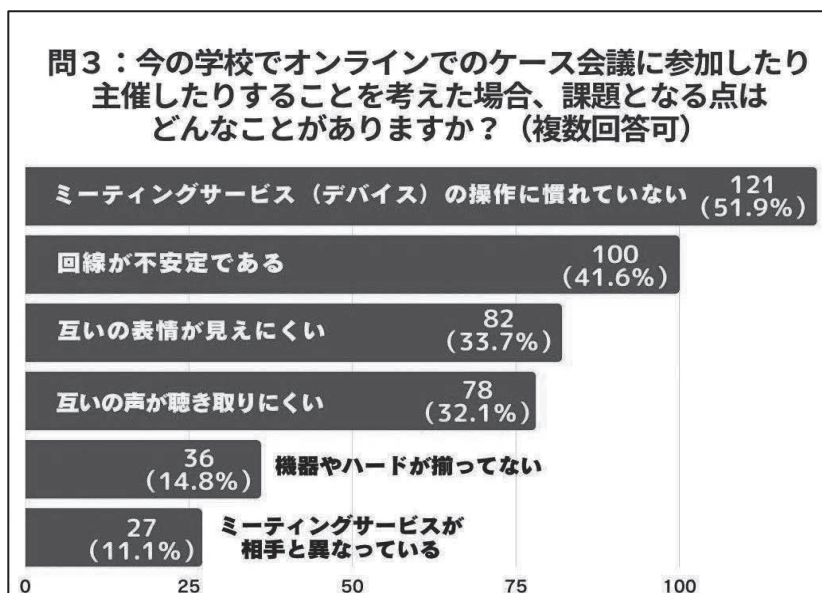


図5 オンラインコンサルテーションを主催する場合の課題

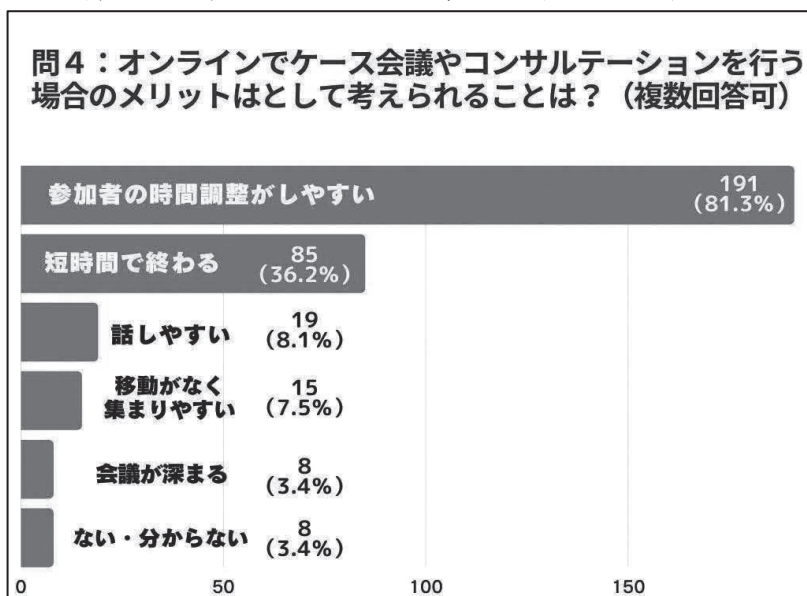


図6 オンラインコンサルテーションのメリット

トとして捉えられていることがあると考えられ、自由記述欄にあった「移動がなく集まりやすい」を含めるとオンラインコンサルテーションが物理的な距離や時間的な制約を軽減すると考えられていることが伺えた。

最後の設問となる問5では有効、活発にオンラインを活用したケース会議やコンサルテーションをするために必要なこと、また、改善点について自由に記述してもらった。

問5: オンラインコンサルテーションの難しかった点 困った点 改善点など(自由記述)

- ・自分達のオンラインに対する意識変更
- ・守秘義務等の共通理解をしっかりと行い、意見を言いやすくすること
- ・教員用端末の更新(あまりにもスペックが低くて使い物にならない)
- ・誰のパソコンでもオンラインでできるように機器やアプリを入れてください
- ・機器操作への慣れ。会議の進め方への理解。
- ・まだまだオンラインの活用はできる人とそうでない人があります。私も含めて、オンラインの活用のハードルが高い人に情報提供してもらえるとありがたいです。
- ・オンライン回線や機器がトラブルなくつかえること。また、操作になれること。
- ・Wi-Fi や空き教室の確保など、学校の環境整備
- ・機器や操作に詳しい人がいないと、つなげないことが何度もありました。会議のスタートに間に合わないこともありました。「こんな基本的なこと」とびっくりされるようなことを、現場では知らない人もいます。オンラインで研修会に参加するための技能を身につけ、オンラインの良さが実感できるようなセンター研修の講座を開設していただきたいです。

上記の意見は自由記述の中の一部抜粋であるが、寄せられた意見の中から頻出単語をテキストマイニングツールを使って可視化したワードクラウド(図7)と、頻出語句の回数をグラフ化したもの(図8)を見ると、やはり「機器」「環境」や「操作」といった名詞が頻出語句として連なり、動詞では、いずれの頻出名詞にもつながる「慣れる」「できる」「整える」などが関連する単語として現れている。

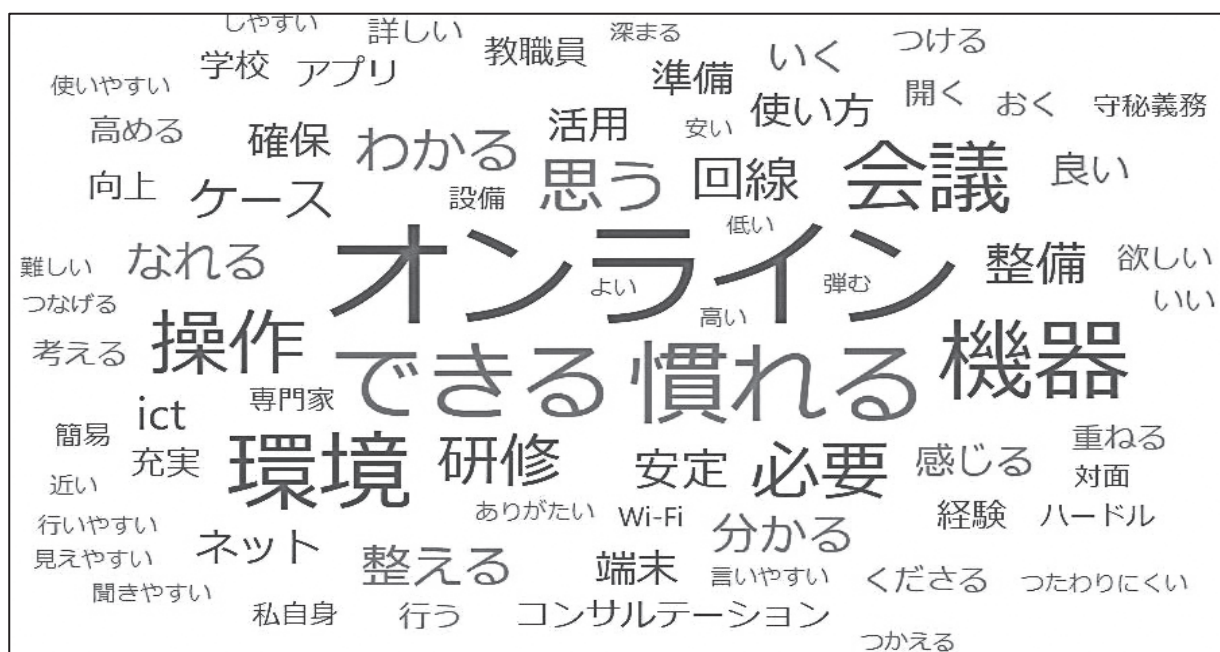


図7 問5への回答をテキストマイニングで抽出した頻出語句

名詞	スコア	出現頻度	動詞	スコア	出現頻度	形容詞	スコア	出現頻度
オンライン	14.74	26	慣れる	5.58	15	やすい	0.23	6
機器	19.57	18	できる	0.18	14	良い	0.03	4
環境	6.44	18	思う	0.04	8	詳しい	0.04	2
会議	6.61	15	整える	2.70	5	欲しい	0.01	2
操作	7.60	13	なれる	0.16	4	安い	0.01	1
必要	0.58	11	分かる	0.08	4	低い	0.02	1
研修	4.27	10	いく	0.02	3	いい	0.00	1
回線	4.97	7	行う	0.04	3	近い	0.02	1
整備	3.28	6	感じる	0.05	3	高い	0.00	1
安定	0.48	5	見る	0.00	2	ありがたい	0.03	1
ICT	5.00	5	聞く	0.01	2	にくい	0.02	1

図8 必要、改善した方が良くと思われることへの回答の頻出語句リスト

③アンケート全体を通しての考察

以上の5つの質問項目から伺えることを以下の3つの視点からまとめることにした。

【ハード面での課題】

- ・オンライン研修等の機会が増え、学校現場の教職員がオンラインを活用する機会は増えてはいるものの、なおも学校現場で使用している機器全てにミーティングサービスが整備されていない等、端末（アプリを含む）の整備が整っているとは言えない。
- ・通信回線の遅さや、Wi-Fi環境の整備は、まだまだ脆弱であり、各学校でいつでも安心して使えるような通信インフラが整っているとは言えない状態にある。
- ・通信回線、機器といったデジタルな環境だけでなく、「コンサルテーションに耐えうる、守秘ができる静かな」部屋など、安全にやり取りできる場所の確保ができにくいという物理的環境面が整わない場合がある。

【ソフト面での課題】

- ・教職員自身がミーティングサービスや機器を使いこなすスキルも自信も十分には高まっていないことで、積極的に取り組みたいという段階までには至っていない。今後のオンラインに関わる研修およびOJTによる校内研修の活性化を図っていく必要性が明らかになったとも言える。

【メリットとして】

- ・オンライン活用について、参加者の時間調整が楽になったり、拘束時間が短くなったりする等のメリットには期待感が高い。

このようなアンケート調査によって、学校現場での「オンラインでのコンサルテーション」についての課題やメリットとして考えられる点が整理でき、いよいよ、実際にコンサルテーションを実施するための手続き等を整備し実践していくことになった。

(2) オンラインコンサルテーション実施に向けた環境整備

学校現場それぞれの機材や通信環境整備については設置主体である市町の整備を待つことになるが、当センター内でできる環境整備を進めていくことにした。

②手続きの流れについて

オンラインコンサルテーションを実施するまでの流れについて、保護者の意思を確認させてもらって以降の手続きの流れを図9のように整理した。

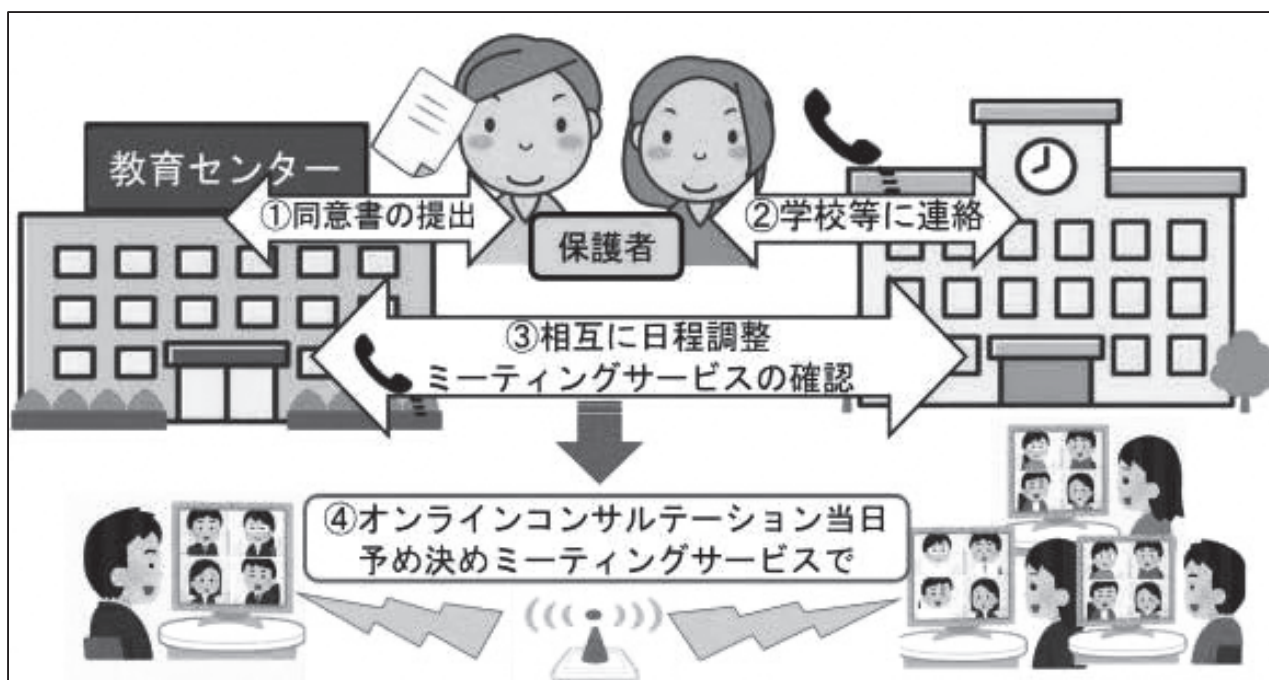


図9 オンラインコンサルテーション実施までの手続きの流れ

保護者から学校にコンサルテーション実施について連絡をしてもらい（図9の②）、学校等と当センターの担当者間で日時等の調整を行っていく（図9の③）という実施までの流れを当センター内で新たに作った。同意書を頂くことで、当センターでの情報がどこに伝わるのかを保護者にも改めて確認してもらい、在籍している学校等との連絡も最初は保護者にしてもらうことで、保護者にも関与してもらいながら進めていくことが大切だと考えたからである。また、今後、学校以外の機関とも情報交換をするケースも想定し、対象は学校だけでなく、病院や医療機関、行政機関（市役所の福祉課など）、放課後等デイサービス、相談支援事業所などと幅を持たせた。

県西部の各市町で導入しているパソコン（端末）や使っているミーティングサービスが異なっているため、基本的には各市町の学校で使っているミーティングサービスから招待メールやアカウントを発行してもらい、当センターはその招待によって参加するという流れを基本とした。そして、運用に当たっては先方の学校や担当教員と調整しながら進めていくこととした。

（3）オンラインコンサルテーションの実践

上記のような手続きの流れを整え、令和3年途中から、条件が整ったケースから、実際にオンラインでのコンサルテーションの実践を開始した。今年度、当センターでオンラインコンサルテーションを実施したのは12件で、主な内容や実施に当たっての概要等を以下の表1にまとめた。この中で、いくつかの特徴的な実践事例を2例取り上げ、その他の事例も併せて運用の実際やヒント、改善点等を見ていきたい。

表 1 今年度のオンラインコンサルテーション実施状況

相手校種	内 容	参 加 者	備考・その他
A 小学校	検査の結果伝え	担任・特別支援 Co	相手校の Meet に招待
B 小学校	検査の結果伝え	担任・通級担当教員	相手校の Meet に招待
C 小学校	検査の結果伝え	特別支援 Co・養護教諭	Zoom を使用
D 小学校	検査の結果伝え	担任・教頭	Zoom を使用
E 小学校	検査の結果伝え	担任・特別支援 Co	相手校の Meet に招待
F 中学校	コンサルテーション	担任・教頭・特別支援 Co	Zoom を使用
G 小学校	検査の結果伝え	担任・教頭・保護者	相手校の Zoom に招待
H 小学校	コンサルテーション	校長	Zoom を使用
I 小学校	検査の結果伝え	担任・養護教諭	相手校の Zoom に招待
J 中学校	検査の結果伝え	担任	相手校の Zoom に招待
K 養護学校	コンサルテーション	担任、学年主任、教育相談 Co	Zoom を使用
L 小学校	コンサルテーション	担任、校長、教頭、前担任、 養護教諭、市教委担当	Zoom を使用

①オンラインコンサルテーションの実践例 その1 画面共有機能を使って

対 象：県西部の小学校

参 加 者：相手校；担任1名 特別支援教育コーディネーター1名

当センター：指導主事2名（検査実施者と本研究担当者）

内 容：当センターで実施した発達検査についての解釈や支援方針についての伝え。

この日のオンラインコンサルテーションのミーティングサービスは相手校が普段、校務で使用しているという GoogleMeet を使用した。相手校から Meet の招待アカウントを出してもらい、相手校も当センターも参加者は一人一台の端末を使って会に参加した。

事前に保護者経由で検査結果の紙資料を学校側に渡しておいてもらい、その検査について実施した検査の概要や、この検査によってどんな力が測れるのか、数値の示す意味などを説明し、次に個別の検査時の様子や検査の数値から考えられる本人の支援方法などを伝えた。

【当日までの事前準備】

- 保護者から検査結果の用紙を学校に渡してもらおう。(難しい場合は、簡易書留等でセンターから送付する)
- 日時の調整(学校とセンター間で)コンサルテーションへの参加者の確認
- ミーティングサービスの決定→先方から、当センターにミーティングに招待の手続き(パスワード送信)



図 10 実際のコンサルテーションの様子

互いの手元の資料を見て説明を聞いてもらうだけでなく、図 11 にあるように、ミーティングアプリの画面共有機能を活用し、伝えたい内容や、共有したいデータなどの情報を画面上で提示し、視覚的にも伝わりやすいように工夫するなどした。数値やグラフをエクセルの画面を使って、画面共有をし、注目してほしい箇所をポイントで提示するなど「オンラインならではの」プレゼンテーション機能を活用した分かりやすい伝え方ができたのではないかと考える。

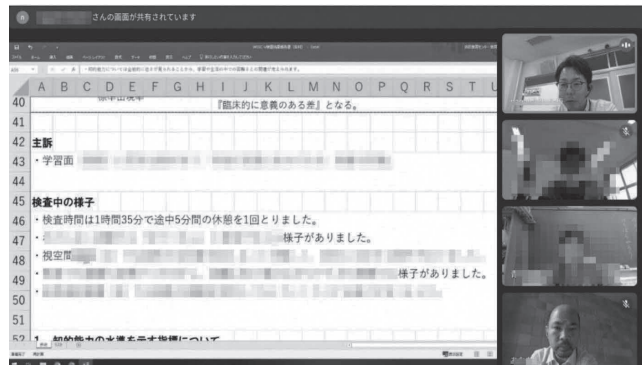


図 11 画面共有機能を使って

②オンラインコンサルテーションの実践例 その2～参加者がよく見えるケース会

対 象： 県西部の小学校

参 加 者： 相手校；担任 1 名 通級指導担当 1 名 保護者 1 名 教頭 1 名 前担任 1 名
当センター：指導主事 2 名（検査実施者と本研究担当者）

内 容： 実施した発達検査結果を踏まえての支援方針など保護者を交えての協議

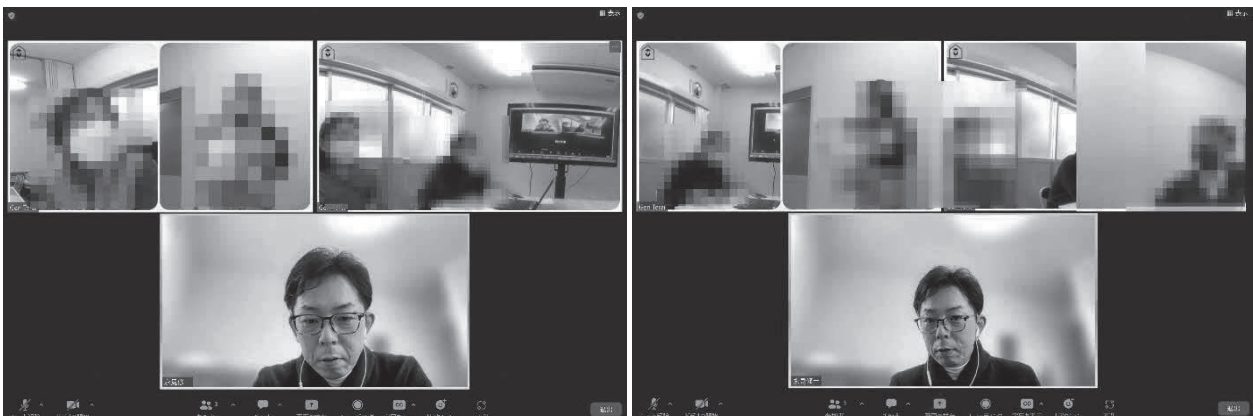


図 12 複数の発言者を映し出すことができる高機能 360 度カメラデバイスで

このケースの当該の自治体は、各学校に Zoom アカウントが配布されていたためミーティングサービスは相手校の Zoom に招待してもらう形での実施となった。このケースで特徴的だったのは、先方の学校で使用していたカメラが、一台で複数のカットを同時に撮影し、AI が発言者を判断して音声を拾ったり、配信する画面割りも自動で行えるという 360°ミーティングカメラだったことである。（使用したカメラ Meeting Owl については後述）

先方の参加者が 5 名と多人数であったが、発言者に自動でカメラがフォーカスするため、複数の参加者であっても参加者はマイクの位置やカメラの向きを気にすることなく自分のタイミングで発言ができ、ストレスなく会話のやりとりを続けることができた。（図 12）

③その他の実践例を通じて ～画面越しのコミュニケーションの視点から～

上記の実践例①②に挙げたような、画面共有やカメラデバイスの高度な機能によって、「伝わりやすさ」を実感したケースもあったが、逆に、難しさを感じるケースもあった。学校にミーティングサービスがインストールされた PC 端末が一台しかない（あるいは自

由に使える端末がない) ケースでは、参加者二人で一台の端末カメラを使用し会議に参加される場合もあった。画面にそれぞれの半身が映っていない状態で、マスクを着用し発言すると、誰が話しているのかがはっきりとしない状況もあった。また、通信回線速度の低下などで参加者の表情や口元がはっきりと見えにくい、音声聞き取りにくいような状況では、些細な伝わりにくさでもストレスを感じるがあった。このような「画面越しで伝えあう」という場面では「相手の表情」や「話者の話す姿」がしっかり映り、音声も含めてはっきりと伝わるのがコミュニケーションの視点からもより重要であることを実感した。学校現場では、様々な制約がありハード面での環境が揃いにくい「参加者ひとり一台ずつ」の端末で参加することが望ましいという点も数回の実践を通じて改めて気づかされた。

(4) 学校現場でも使いやすいコンサルテーション環境についての整理・提案

オンラインコンサルテーション実施後に、Google フォームを使って、参加者に次のようなアンケートを実施した。オンラインで行ったコンサルテーションの満足度や改善点等について調査を行い、各設問に対する回答から、学校でもより使いやすいオンラインコンサルテーションの環境や方法について分析し、考察を行う。

問1：学校種別

小学校 中学校 高等学校 特別支援学校 その他の外部機関

問2：今回のオンラインコンサルテーションの参加者（複数回答）

担任 特別支援コーディネーター 教育相談コーディネーター
養護教諭 教頭

問3：今回使用したミーティングツール（web 会議システム）

Google Meet Microsoft Teams Zoom その他：

問4：ご今回のコンサルの主な内容

検査結果のお伝え ケースについての相談助言 その他：

問5：「コンサルテーションをオンラインで行った」ことに対する満足度

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

とてもよくなかった ←

→ とてもよかった

問6：今回のオンラインコンサルで感じられたメリットについて（クロス回答）

とてもそう思わない←

→とてもそう思う

	1	2	3	4	5
タイムリーに開催できる	○	○	○	○	○
スケジュール調整が簡単	○	○	○	○	○
移動時間の短縮	○	○	○	○	○
オンラインの方がわかりやすい	○	○	○	○	○
複数人で聞ける	○	○	○	○	○

問7：オンラインコンサルテーションの難しかった点 困った点 改善点など

問8：今後、このようなオンラインでの支援などの場面が広がっていくと思います。今後の可能性など感じられたことがあればお書きください。（自由記述）

問2の参加者（図13）については、やはり担任が参加しているケースが圧倒的に多く、続いて特別支援教育コーディネーター、教頭と続いている。今回のオンライン会議の内容のほとんどが検査後の支援についての伝えであったこともあり、特別支援教育コーディネーターが積極的に関わる事例ケースが多かったことが関係していると推察される。また、一方で、管理職が「支援を必要としている児童生徒」のケース会に多く参加していることも、コーディネーターの参加と併せ、担任だけに任せるのではなく、学校全体として組織的に関わっていかうという肯定的な意識の表れと捉えられる。

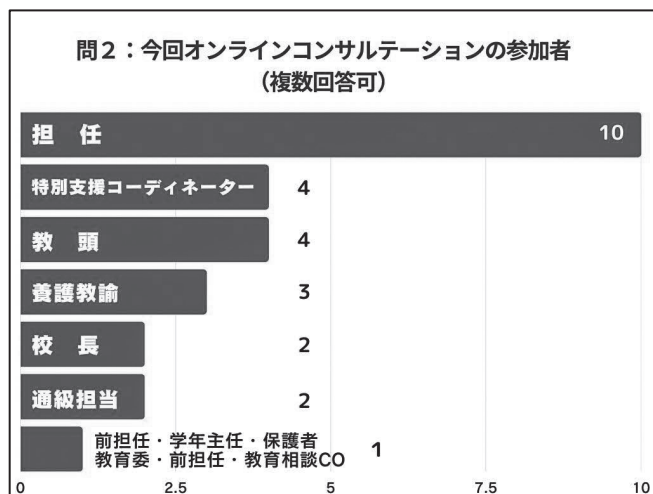


図13 オンラインコンサルテーションの参加者

また、管理職のコンサルテーション参加について、打ち合わせの段階では管理職が参加することになっていたものの、校内の緊急的な対応や、前の会議が延長するなどして急遽不参加になったケースがいくつかあった。このように本来であれば、管理職はその職務の性質から、コンサルテーションが設定されやすい放課後に学校を離れ、当センターまで出向いて会議に参加することはできにくい状況が多いと予想されるが、オンラインで開催することで、コンサルテーションに管理職の参加を促進する可能性も広がるのではという期待も感じた。

問3の使用したミーティングサービス（図14）については、図9にあるように手続き上の流れを考えた当初は、各学校からミーティングサービスの招待コードを送ってもらい先方が設定した会議に参加するという流れを考えていたものの、各市町で導入しているパソコンやデバイス・Web会議システムが様々であることや、担当する教職員が不慣れで「（外部の人を）招待をする設定が難しい」などの理由もあり、島根県教育センターのZoomアカウントを借りてコンサル

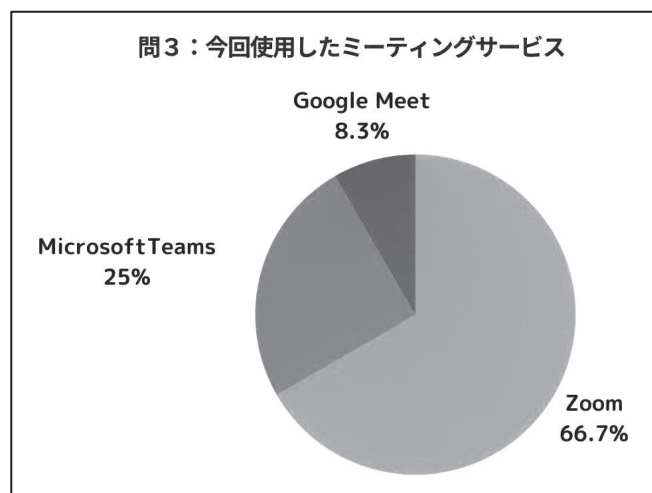


図14 Zoomが最も使われた

テーションを実施することもあった。ミーティングサービスとしては、教職員研修などでも接する機会の多いZoomが親和性も高く、接続に不安感がある教職員も安心感をもって接続できるということからもZoomが活用されやすいのではと感じた。

問5ではコンサルテーションをオンラインで行った満足度について訊いている。（図15）肯定的な意見の合計が88%超であり、参加された方は好意的にとらえていると考えられる。しかし、自由記述欄に「やはり対面式の方が心が通うような気がしています。特に、特別支援関係の会議の場合は、一層そう思います。」という意見も見られた。

前述の実践紹介でも挙げたように、パソコンの画面越しの相手に「情報を伝える」という視点での機能としてはオンラインは十分であるが、特に保護者が参加される場合のように、結果や支援方法をお伝えして終わりではない状況等であれば、より「対面で」「雰囲気を感じとりながら」という配慮が求められるとも言える。

問6：オンラインでのコンサルテーションのメリットについては、考えられるであろう5つの観点別に5件法で訊いてみた。一番多くの人々が挙げていたのは移動時間の短縮で、オンラインで会を行うことのメリットを最も享受できる項目であることは予想に違わない結果であった。スケジュール調整（図16-2）とタイムリーに開催できる（図16-3）は、会を設定するまでの事前段階として各所、各人との調整が必要な場面でのメリットが感じられる部分で、「スケジュール調整が簡単にできるので、タイムリーに開催できる」と考えられる。

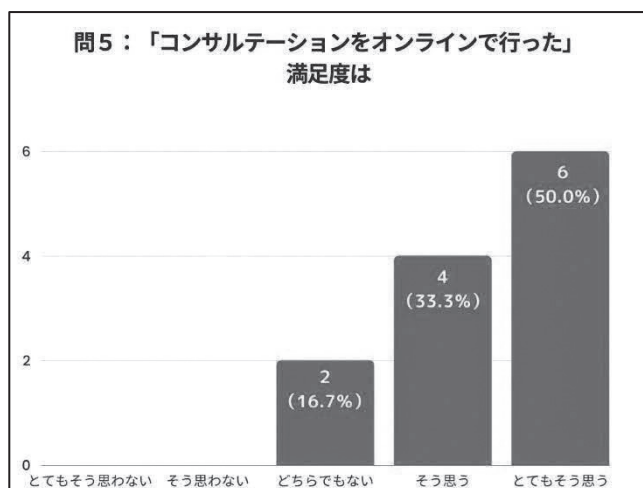


図15 オンラインで行った満足度について

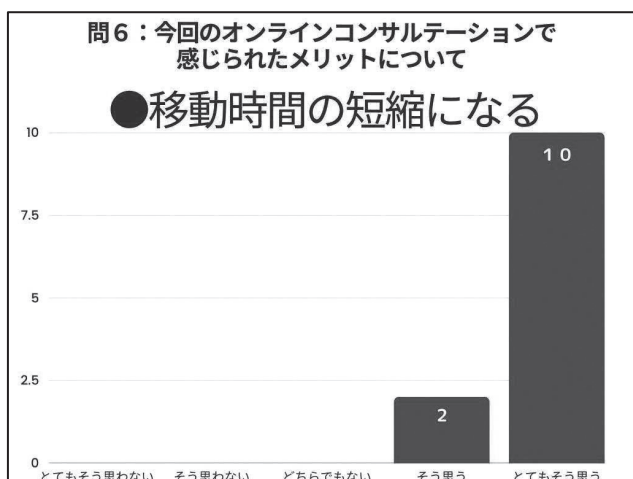


図16-1 移動時間の短縮について

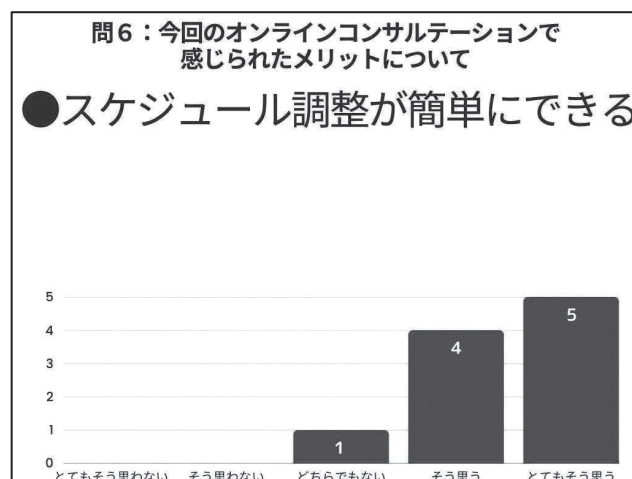


図16-2 スケジュール調整について

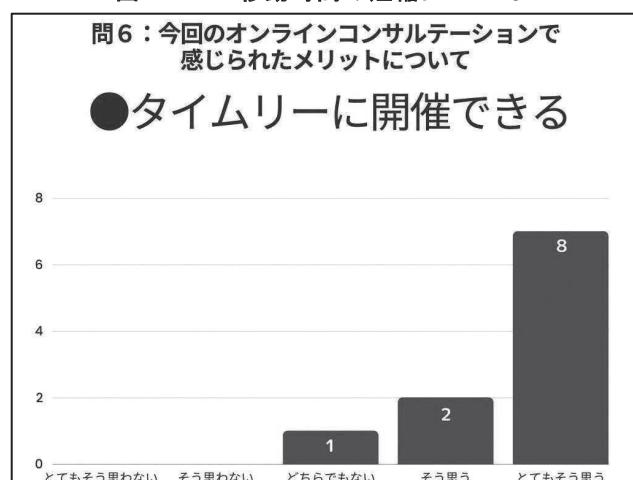


図16-3 タイムリーに開催できる

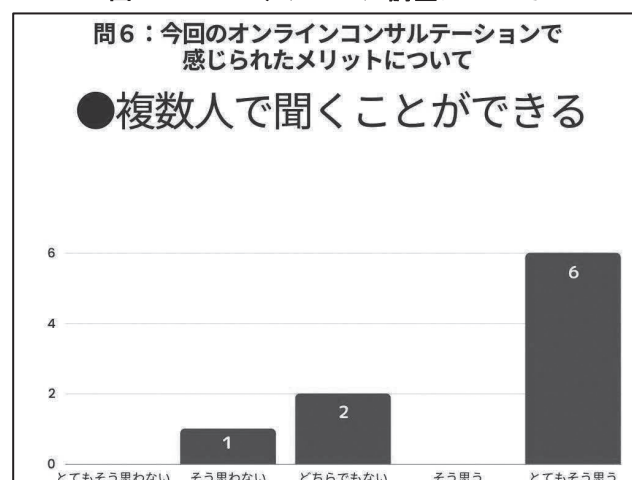


図16-4 複数人で聞くことができる

一方で、オンラインでの開催に当たってデメリットを感じる結果となったのが、「オンラインの方がわかりやすい」（図 16-3）である。「実際に（検査で使う）器具とかが絡んでくると、実物があった方がいいなと思う。」という意見等もあり、対面の方が機に応じて質問がしやすいということもあってか、この質問に対して、オンラインでの分かりやすさについては、対面での実施の方がメリットを感じておられる結果となった。

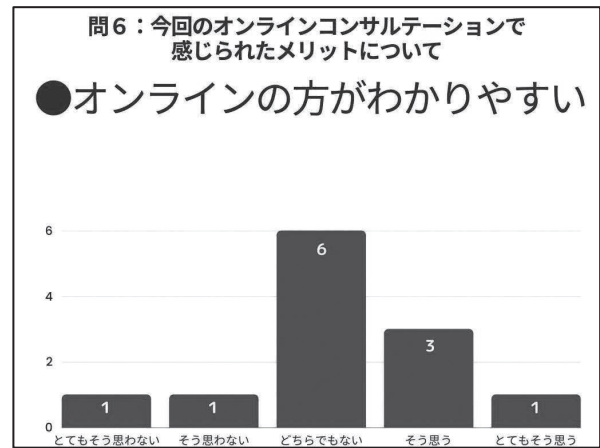


図 16-5 オンラインの方がわかりやすい

問7：今回のオンラインで難しかった点 困った点 改善点など（自由記述）

- ご丁寧に説明をしていただき、ありがとうございました。
- 実際に器具とかが絡んでくると、実物があった方がいいなと思う時がある。慣れてくると、共有画面やリンクを張ったりするなど、対面以外のものを提示しながらできるといいです。
- 最初に招待するやり方が分からず、お世話をかけました。できれば使い慣れている Zoom が使いやすいです。
- こちらの機材の設定がなかなかできなかった
- 慣れないと接続まで時間がかかる。
- ただの感想なのですが、やっぱり、対面式の方が心が通うような気がしていいです。特に、特別支援関係の会議の場合は、いっそう、そう思います。

問8：今後、このようなオンラインでの支援などの場面が広がっていくと思います。今後の可能性など感じられたことがあればお書きください。（自由記述）

- 日程調整がしやすく、また移動時間を避ける分、放課後の時間に共有時間をとることができるので、とてもよいと思った。
- オンラインでできてよかったです。
- 便利な世の中になりました。家庭にもこういった環境が入ると、保護者も家から参加できます。実際に会って話をする方が大事だとは思いますが、相談や診療ではないので、検査結果のお伝えなどは今日のような形でいいのかなと思いました。また、meeting owl(※注) はとても便利です♪ さらに、私は StreamYard を使っていますが、これも便利です。
- オンラインでもらえたことで、とても時間の短縮ができてよかったです。こういうことができるようになれば、もっと気軽に相談もできると思います。ありがとうございました。
- 一人一台で参加できてとてもよかったです。互いに話すことも分かりやすく伝わりました。
- 設備さえ整っていれば、音声もしっかり聞こえるので違和感をあまり感じることなく会議できることを実感しました。タイムラグもなかったと思いました。

問7の自由記述にあるように、機材の設定や GoogleMeet への招待など、各学校での ICT 機材やネット環境、教職員のスキルにも差がある場合もあると想像される。実際に、オンラインでのコンサルテーションを呼びかけた学校の中でも「オンラインは(パソコン機器が)苦手なので、センターに伺います」と来所されるケースもあった。今後もオンラインミーティングへの習熟が進めば、もっと簡単に教職員も取り組むまでの心理的ハードルが低くなると考えられる。ICT活用の研修機会はこれからもより増えていくと思われるので、現場の教職員のスキルアップにより、取り組みやすさが改善されることが望まれる。

ハード面については、問8の回答の中にあるように、すでに学校現場の教職員の中でも先駆的に機材を活用することで、オンラインミーティングにより一層適した環境整備ができていた学校もあった。回答にあった meeting owl (後述) は個人所有の機材であったが、当センターとしても、新しいテクノロジーを取り入れ活用し、学校現場に有益な情報を提供していくことが望まれる。また、ミーティングサービスについても、設定に苦慮する現場の現状もあることから、島根県教育センターの研修用 Zoom のアカウントを使わせてもらい接続したこともあった。島根県教育センターと当センターの相談室でも優先的に使える Zoom アカウントを整備するなどの対応ができるとよいと考える。

※注 オンラインコンサルテーションで活用が期待される機材

ミーティングオウル

Meeting Owl Pro
web 会議用 360°カメラ
AI 自動フォーカス
マイク スピーカー搭載



360度対応の
カメラ、マイク、
スピーカーを搭載



AIが話者に
自動でフォーカス



マイクスピーカーシステム

雑音の多い環境下でも快適な
遠隔コミュニケーションを実現
会議室での4～6人の会議でも
使用できる。当センターでも会
議等時に使用。



一方で「対面で伝えること」を大切にしたいという「コンサルテーションへの想い」も自由記述の中で伝えられた回答もあった。「オンラインで情報として伝えることができること」も多くあるが、オンラインでは伝えにくい機微な情報や、空気感のようなものは確実に存在する。

テクノロジーを含めたハード面での技術の進歩や教職員の ICT スキルが熟達していったとしても、コンサルテーションという場面では、伝わるもの・伝えにくいものがあるということを知った上で、オンライン化を進めていく必要があると考える。

私たちが心に留めておかなければならないことは「情報」だけを伝えるコンサルテーションにならないようにすることであり、伝える相手に正しく届く、正しく受け止めてもらえるようなコンサルテーションを目指すことである。それは、オンラインであろうと対面であろうと変わることはない、コンサルテーションで大切な基盤的な態度であり姿勢であると改めて思う。

(5) オンラインの先進的な活用に取り組む教育施設からの学び

当センターでこのようなオンラインでのコンサルテーションの実践に取り組みつつある中、令和4年12月「増え続ける不登校の児童生徒らを支援するため、文部科学省は来年度、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーがオンラインで相談に乗る拠点を、新たに各都道府県に整備する方針を固めた。」との報道があった。

これは、教職員を対象としたオンラインでのコンサルテーションだけでなく、もっと幅広いオンライン活用の教育相談やオンラインを活用した幅広い積極的教育相談が広がっていく潮流を感じるものであり、コンサルテーションだけでない学校支援、児童生徒支援につながるものであると思われた。そこで、次年度以降のオンラインコンサルテーションやオンライン相談の在り方について有効な知見を得、先進的に「教育相談」や「不登校支援」にオンラインを活用している教育施設などを訪問し取材をしたいと考え、広島県の3か所の訪問を行うこととした。そのうちの不登校支援を行っている1か所はオンラインでの支援は行っていないため、ここでは残りの2か所について紹介する。

①広島県教育支援センター 「スクールS」(不登校支援センター)

広島県教育委員会では不登校児童生徒の支援を目的に、令和元年度から県内の公立小中学校に「スペシャルサポートルーム」(以下、SSR)の設置を始め、令和4年現在、小中学校合わせて33校の学校にSSRを設置している。そのSSRを統括するセンターとして、また「学校で学びにくい子どもたちが自分自身で学びたい内容を学びたい方法で学べる場所」として「個別最適な学びを保障する」という視点からスクールSを立ち上げた。



図17 不登校支援センター長との協議

スクールSでは、学校に行きにくい児童生徒を対象に様々な支援や取り組みを行っているが、ここではオンラインを活用した支援や活動について取り上げたい。

【各市町のSSRとの連携、支援】

昨年度までは、各学校のSSR担当の指導主事が毎週1回は教室を回り、情報共有や調整などを行っていたが、SSR設置校が33校と増えた今年度は、巡回ができないと

ころは、月1回程度の訪問とオンラインによる各SSR支援会議、情報共有などを行っている。コロナの影響が大きく、学校への巡回ができなかった令和3年度は、ほとんどの支援、指導をオンラインで実施することとなった。各SSRへの支援の主な内容は個別のサポート

SSR(スペシャルサポートルーム)は、どんな場所なのか。

◎通常の教室への復帰を前提とはしていない。

◎居場所であるとともに成長できる場である。

◎「生きる力」を育むことを目指す。

・相談する力

・自分の強みを知り、生かす力・苦手な場面でSOSを出せる力



◎時間割を変更したい場合、相談できる。

◎利用する児童生徒の伴走者として担当者が決まっている。



図18 県内33校に設置されているSSRについて

計画の作成のためのアセスメント支援、在籍している児童生徒の学習へのアドバイスなどが行われており、この活動自体は一般的に教育センターと学校間で行われているコンサルテーションの形態とも似ているところがある。しかし、必要な相談ニーズが生じた時だけ SSR から援助的にやりとりをするのではなく、スクールSが各 SSR をつなぐハブのような役割を果たし、定期的かつ計画的に支援が行われているのが最も大きな特徴であると言える。各学校の SSR には個々の運営の難しさや特徴があると思われるが、児童生徒の支援について、いつでもオンラインでつながって助言をもらえる指導的なセンターが存在していることは、SSR を運営する教職員にとっても、そこで学ぶ児童生徒にとっても心強い場所としてスクールSが果たしている役割は大きいであろうことが想像された。

【児童生徒が学ぶ手段としてのオンライン活用】

令和5年2月の訪問時で、スクールSの登録児童生徒は200名以上であるが、実際にスクールSに通ってきているのは毎日40名前後とのこと。居住地が遠方であったり、スクールSに来所することが困難

月	オンライン学びプログラム	オンラインクラブ活動
7月	<p>「MADE IN ○○」 身の回りにある資料の調べで自分の発見を、どんな図があるかな？ 名前・年号を記す。 ※ 7月8日(水) 10:45~11:30、7月15日(水) 13:30~14:15 ※内容は同じ ※ 7月9日(木) 13:30~14:15、7月16日(木) 10:45~11:30 ※内容は同じ</p> <p>「3ヒントクイズ」 3ヒントから謎を解き明かすクイズ。言葉はフクロの形。言葉は英語から出題するよ。ついでにとりかかろうよ。 ※ 7月9日(木) 10:45~11:30、7月16日(木) 13:30~14:15 ※内容は同じ ※ 7月9日(木) 13:30~14:15、7月16日(木) 10:45~11:30 ※内容は同じ</p>	<p>7月13日(火) クラブ活動がはじまります</p> <p>生き物クラブ：10:45~11:30 生き物好き集まれ！</p> <p>イラストクラブ：13:30~14:15 イラスト好き集まれ！</p>

図19 オンラインでの学びを支える取組

であったりする児童生徒を対象に図19にあるようなオンラインを使った学習の機会を提供している。学びプログラムの内容は、スクールSのスタッフが授業を配信するだけではなく、歴史民俗資料館や少年自然の家、企業などとのコラボ授業として、各ジャンルの専門家が複数回に渡っての授業配信を行うなど、オンラインの利点を活用し「学校」以外の講師の方からも、多様な授業を受けることができるのも特徴的であった。

また、図20にあるような、スタジオ風の Zoom 配信教室を2部屋使って授業のライブ配信を1日の中で2時間設定している。この日も体験の生徒を含め12名の児童生徒がチャットを通じ、授業者の教員とやりとりをしている様子を参観させていただいた。



図20 リアルタイム配信で児童生徒と直接やりとりも

登校することに抵抗感がある児童生徒が、「学校に行くというスタイルにこだわらず」に、学びやすい場所で学びやすい方法で学習できることを

大切にしている、ここでもオンラインを活用し「つながる」ことが重要とされている。子どもたちの学びを途切れさせない、どこかにつながって学んでいることを大切にするというスクールSの理念を具現化している場面だと感じた。

文部科学省が謳っている、「オンラインを活用した相談拠点を各都道府県に整備する」という機能も、スクールSが担うことも既に想定されているとのことで、同じような取り

組みは本県では難しいであろうが、オンラインを活用した取組として参考になる情報を多く得ることができた。

②広島大学教育学部附属特別支援教育実践センター

【特別支援教育に関するセンター】

広島大学教育学部附属特別支援教育実践センターは、広島大学の中に設置されている「特別支援に関する相談」に特化した相談センターである。大学の教育学部の中に設置されているということから、一般的なイメージにある相談者が来所して対話による相談というよりも、障がいのある児童生徒に対して、自立活動的な支援や ICT 活用による学習の支援の提案や指導など、「困難さを抱えている児童生徒」に対し実践的な支援を行う取り組みをしている。(下資料：波線部分)



図 21 2名の教授と実践に取り組んでおられる大学院生

というよりも、障がいのある児童生徒に対して、自立活動的な支援や ICT 活用による学習の支援の提案や指導など、「困難さを抱えている児童生徒」に対し実践的な支援を行う取り組みをしている。(下資料：波線部分)

1. 障害のある児童生徒の教育に関する相談、助言及び障害のある児童生徒に対する教育的支援
2. 学生への特別支援教育分野に関する実践的教育
3. 現職の教師、指導者への研修
4. 障害のある児童生徒の教育的支援及び支援にかかわる諸問題についての調査及び研究

(資料：広島大学教育学部附属特別支援教育実践センターの事業から)

コロナ流行以後は、それまでの来所対面指導から、オンラインを活用した教育相談、教育支援についての研究と実践を始めていて、特に、ICT を活用した指導支援については広島県下の小中学校だけでなく、出雲市や松江市での相談にも対応したことがあるとのことであった。

特別支援教育実践センターに訪問させて頂いた折には、実際にオンラインで対象児童と遠隔でどのような指導をしているのかをビデオで見せて頂くことができた。大学の研究室からの指導場面であったが、図 22 にあるように、ディスプレイを複数台活用し、書画カメラなどのデバイスも複数使って、「オンライン」というテクノロジーを使った本格的な遠隔での指導場面を見せて頂いた。児童生徒へのオンラインによる直接指導支援だけでなく、現地の学校に大学院生が助手として派遣され、学校での機材のセッティングやカメラの角度なども調整するなど、オンラインによる指導と現地のスタッフとのハイブリッドでの指導も

① 2022年度の取り組みから

2022年6月～7月実施

【接続環境】

```

graph TD
    subgraph "接続環境"
        Mac[iMac] --- SubDisplay[サブディスプレイ]
        Mac --- Camera[書画カメラ]
        Mac --- iPad[iPad]
        Mac --- Lighting[Lighting]
        SubDisplay --- iPad
        iPad --- Mac
    end
    Note[サブディスプレイの画面を共有]
        
```

【ディスプレイ表示】

Mac

Zoom

大学からの映像

サブディスプレイ

Quick Time Player

書画カメラ

Visualizer

iPadの映像

児童の顔

【使用している機材】

- ① iMac (大学の映像+音声用)
- ② サブディスプレイ
- ③ iPad (児童学習用)
- ④ 書画カメラ (児童の手元撮影用)

【使用しているソフトウェア等】

- ① Quick Time Player
- ② Visualizer
- ③ Quick Camera
- ④ Zoom

図 22 氏間准教授「ICT を活用した自立活動の効果的な指導の在り方の調査研究」

図 22 にあるように、ディスプレイを複数台活用し、書画カメラなどのデバイスも複数使って、「オンライン」というテクノロジーを使った本格的な遠隔での指導場面を見せて頂いた。児童生徒へのオンラインによる直接指導支援だけでなく、現地の学校に大学院生が助手として派遣され、学校での機材のセッティングやカメラの角度なども調整するなど、オンラインによる指導と現地のスタッフとのハイブリッドでの指導も

展開しているとのことだった。

また、図 23 にあるような遠隔での相談会やケース会議なども行って、現在、当センターで実施しているコンサルテーションがこの「ケース会議」や「相談会」に該当すると考えられる。現在の当センターで行っているコンサルテーションのケースの主な話題は「発達検査等のお伝え」が主になっていることもあり、特別支援教育の内容に関わるものがほとんどである。機材設備や環境の差が大きく、特別支援教育実践センターで実践しているようなオンライン指導の展開まではいかないが、今後、当センターがオンライン相談の拠点となった場合には、このようなオンラインの相談活用の方法があることを知ることができたのは大きな収穫であった。

実施内容

- 「遠隔指導」…学校と専門家をつなぎリアルタイムで指導
- 「遠隔観察」…学校と専門家をつなぎリアルタイムで観察
- 「ケース会議」…遠隔観察後に遠隔で行うケース会議
- 「遠隔研修」…学校と専門家をつなぎリアルタイムで研修
- 「打ち合わせ」…学校や教育委員会との打ち合わせ
- 「機材調整」…機材の搬入及び設定のための学校訪問
- 「相談会」…放課後に相談会の実施
- 「研修」…東広島市立学校教育研究会 小学校特別支援教育委員会
会通級指導部会 における報告及び研修

Uji. Lab.

10

図 23 氏間准教授「ICT を活用した自立活動の効果的な指導の在り方の調査研究」

5 まとめ

今年度は、「オンラインを活用したコンサルテーション」について、県西部の学校や教職員にとっても利点が大きいと考え、実際にいくつかのケースを実践してみた。実践を進めていく中で課題点や整理すべき点、保護者、相手校などとのやり取りの方法などの手順等を整理することができた。コロナ禍で、対面することができなかつた頃からの課題でもあったコンサルテーションのオンライン化が、数はまだ少数でも実践の緒に就いたというのが今年度の大きな進歩であると考えられる。しかし、実践をしていく中では、やはり「対面で伝える、伝わるということの価値」も改めて問い直される場面があり、全てオンラインであれば解決する。というものでもないということも感じた。

オンラインでつなぐ際のカメラやスピーカーなどの機器等ハード面については、機材を整備していくことでミーティング時のストレスや伝わりにくさ、臨場感を改善することができると思う。しかし、各学校での整備や、機材のセッティングやミーティングサービスのアカウントなどの準備段階で難しさを教職員が感じているケースも多く、スキルアップとともに、学校現場とのやり取りに日常的に使うことで、使いやすさ、つながりやすさ、気安さに広がっていくことが期待される。また、ミーティングサービスの設定など、不慣れな学校現場の負担を軽減する意味でも、広く使用され、ミーティングサービスのデフォルトにもなっている Zoom アカウントが相談専用で使用できるよう整備が求められる。

次年度以降も、今年度取り組んだ結果を基に、さらに「学校現場で活用され、メリットと感じてもらえる」オンラインコンサルテーションの方法や在り方について探っていきたい。学校現場の忙しさ、時間のなさはおそらく次年度以降も変わることがないであろう。当センターの研究テーマ「学校現場での活用に資するもの」「学校現場を支える」というゴールに向かって、今後も、学校と一緒に歩むセンターでありたい。

【引用・参考資料】

- ・広島県教育支援センター 不登校支援センタースクールS 説明資料
- ・広島大学教育学部附属特別支援教育実践センター 氏間和仁准教授
「ICTを活用した自立活動の効果的な指導の在り方の調査研究」
- ・広島大学教育学部附属特別支援教育実践センターHP
- ・NHK 広島放送局 ひろしま WEB 特集スクールS 「最適な学びを」



- ・東洋経済 ONLINE education 特集 スクールS
「オンラインの探究学習やクラブ活動が好評」

